埼玉県立
歴史と民俗の博物館

THE AI MUSEUM

Vol.2-2 第5号 2007.10.15

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

11月1日 彩の国教育の日

特別展 お伊勢さんと武蔵

平成十九年十月十六日(火)～十一月二十五日(日)
※会期中毎月曜日休館

主催：埼玉県立歴史と民俗の博物館・(社)霞会館

特別協力：神宮司廳

御　鏡

黒葦毛御彫馬

伊勢神宮は、正式には「神宮」といいます。神宮は、2000年前に伊勢に鎮座し、飛鳥時代の西暦690年に式年遷宮が開始されました。以来一時中断はあったものの、現在までほぼ20年毎に古式通りに、当代最高の技術者によって新たに神殿と御装束神宝がつくりかえられてきました。

今回、平成25年に第62回式年遷宮が行われるにあたり、これにちなんで、その性格から普段一般に目にすることのない御装束神宝をはじめとして、伊勢と武蔵の関わりについて、様々な角度から展示紹介します。

＜目　次＞

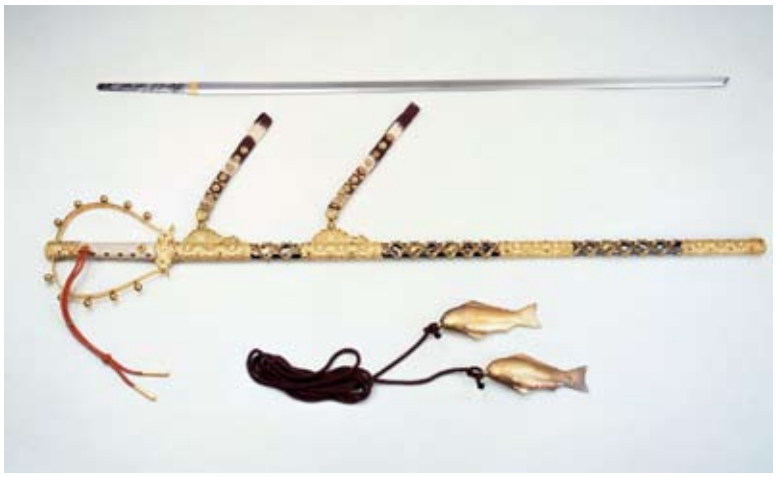
◆特別展「お伊勢さんと武蔵」・・・・・・・・・・・・・・1～3
◆特別展関連事業民俗芸能公演「伊勢音頭と接待餅」・・・・・4
◆学芸員のおと－神宮のある風景とまちづくり－・・・・・・・5
◆常設展示室から 重要文化財の瓦塔・瓦堂を展示しました！・・6
◆歴史のしおり「今は昔」のすばらしい包装材　ヘギのお話・・7
◆歴史と民俗の博物館イベント情報・・・・・・・・・・・・・8

第 1 章　伊勢神宮

何故、式年遷宮が 20 年毎に行われ、しかも神殿と御装束神宝がすべてつくりかえられるのか、様々な説が唱えられています。代表的なものとして、後継者育成と技術伝承のため、また古儀を繰り返して新たに造替することで神の力が再生するとも説かれています。

いずれにせよ、式年遷宮の度に 1600 点近い御装束神宝が新調されるのです。神殿等の材木は、別宮や鳥居など、そして全国の神社などの造営に再利用、再々利用されてきました。しかし、御装束神宝については、明治以前までは神様が使われたものとして一般の目に触れることを憚り、土中に埋められたりするなどしていました。ところが、技術伝承の困難さなどから保存することになり、公開されるようになりました。

展示では、外宮正殿の御扉や内宮正殿御扉の鍵類、そして神宝類随一といわれる華麗な玉纏御太刀は、今回の神宝類の中でも見逃せないものです。古来から変わらない最高の技術と神宝の姿を御覧ください。



玉纏御太刀　　神宮司廳蔵

玉纏御太刀（部分）

第 2 章　伊勢の祭礼

伊勢では、式年遷宮はもとより、様々な祭礼や、伊勢参りの人々を楽しませるための芸能が催されました。

大々神楽は、伊勢参りの人々が神恩に祈念して奉納する神楽で、古くから催されてきました。現在でも各地の神社には、お伊勢参りの記念として大々神楽の奉納額が掲げられており、目にすることがあると思います。まさにお伊勢参りは、大々神楽奉納が主眼であったといってもいいでしょう。

また、伊勢音頭は、伊勢参りの精進落としの場であった古市から始まりました。荷物にならない伊勢土産として全国に広まり、埼玉県にも伊勢音頭が伝えられています。伊勢歌舞伎も、全国から来た人々が見ることから、ここで評判をとって上方や江戸へと進出していきました。このコーナーでは、大々神楽、伊勢音頭や伊勢歌舞伎を華麗な衣装や道具、錦絵で紹介します。

淡赤地瀧に熊文様打掛（千束屋旧蔵資料）
皇學館大学佐川記念神道博物館蔵

錦 御履　神宮司廳蔵

第３章　武蔵と伊勢

鎌倉時代の武蔵国では、神宮神領として大河土御厨などが知られており、源頼朝をはじめとして、武蔵武士など幕府御家人により神領が寄進されるなど、伊勢信仰に篤い土地でした。この神領を記した『神鳳鈔』は、現存最古の写本として今年３月に重要文化財に指定され、早くも当館でお披露目です。

重要文化財　神鳳鈔
神宮文庫蔵

江戸時代には、“一生に一度は、お伊勢さんへ”といわれるように、庶民にとってお伊勢参りは悲願でもありました。このお伊勢参りには、御師の存在を見過ごすことはできません。御師は、神宮の神職を勤めながら、村々を回り御祓大麻や伊勢暦などを配ってお伊勢参りを勧誘しました。お伊勢参りに出た村人は、御師の館に泊まり大々神楽を奉納しました。このコーナーでは、道中日記や名所図会、御師との関係資料などから、お伊勢参りの様子と武蔵と伊勢との関係を明らかにします。また、コラムとして伊勢土産をとりあげ、江戸時代の代表的な土産の伊勢暦や今では見られなくなったハリセンボンなどを紹介します。

一方、人的交流も太い絆があり、国学者で埼玉にゆかりのある塙保己一は、『群書類従』の編纂に神宮の文庫を訪れており、成果も収載されています。また国学の大家・本居宣長の学説を批判して一学派を立てた伊勢出身の橘守部は、今の幸手市に居住して、著作は神宮の神主を通じて朝廷に献上されています。越谷に仮寓した平田篤胤も近郷に門人を輩出しています。彼らの著作などを通じて、武蔵と伊勢の関わりを紹介します。

塙 保己一画像　当館蔵

伊勢参宮奉納絵馬　熊谷市　代八幡神社蔵

第４章　新生を寿ぐ

季節展示室では、昭和 28 年 (1953) に行われた第 59 回式年遷宮を記念して、当時一線で活躍していた作家により奉納された美術品を紹介します。今回は、埼玉県と東京都にゆかりのある作家の作品を展示します。石井柏亭、伊東深水、小倉右一郎、北村西望、杉山寧、寺内萬次郎、安井曾太郎など、錚々たる作家の作品を御覧いただけます。

むすびに　～武蔵と伊勢のかけはし～

単なるお伊勢参りという神社参詣の範疇や時代を超えて、お伊勢さんを媒介にして無意識のうちに両国が互いに物的、人的交流がなされていたことが感じられるでしょう。

今回の展覧会を通して、お伊勢さんのみならず、古くから交流してきた武蔵と伊勢の文化や人物を理解するかけはしとなれば幸いです。

（展示担当　杉山正司）

――――――― 関連事業 ―――――――

記念講演会

① 10 月 21 日 (日)　午後 1 時 30 分から
「伊勢の神宮と日本人」
講師：伴　五十嗣郎氏 (皇學館大学学長)

② 10 月 28 日 (日)　午後 1 時 30 分から
「伊勢の神宮と武蔵－武蔵人の伊勢信仰―」
講師：岡田　登氏 (皇學館大学教授)

③ 11 月 11 日 (日)　午後 1 時 30 分から
「神宮の神宝と御装束」
講師：岡田芳幸氏 (皇學館大学准教授)

展示解説

10 月 20 日・27 日・11 月 10 日・17 日の
各土曜日　午後２時から

特別展関連事業民俗芸能公演　伊勢音頭と接待餅

日時：平成１９年１１月１８日（日）　午後１時３０分から　会場：当館エントランスホール

県内には、神楽、獅子舞、祭り囃子などさまざまな民俗芸能が伝承されていますが、その中で「伊勢は津でもつ　津は伊勢でもつ　尾張名古屋は城でもつ」という歌詞を聞けば、すぐに「伊勢音頭」と思い浮かぶことと思います。

県内の民俗芸能では、豊年万作を祝う芸能や餅搗き踊りの中に「ヤートコセ　ヨーイヤナ」という歌の囃しを持つ伊勢音頭が多く伝承されています。この音頭は、五十鈴川のほとりに鎮座する伊勢神宮（お伊勢さん）に詣る人々が全国から集まり、伊勢発信の「音頭」が全国に広まっていったものでした。伊勢信仰は、天照大神を祀った伊勢神宮につかえる「御師（おんし）」が、全国を廻り一般庶民に広めて行きました。また伊勢参りに行けない庶民に代わって参詣する「願人坊主（がんにんぼうず）」なども、伊勢音頭の唄を持って各地に広めていきました。

今回の芸能公演では、児玉郡美里町の駒衣（こまぎぬ）伊勢音頭保存会の方には手踊りの曲「目出度（めでたい）」「伊勢は津でもつ」「相之山（あいのやま）では」と「段物（だんもの）」といって役者が台詞をいいながら掛け合って伊勢音頭を踊る「本朝二十四孝（ほんちょうにじゅうしこう）　荀掘之場（たけのこほりのば）」「仮名手本忠臣蔵三段目（かなてほんちゅうしんぐらさんだんめ）　お軽勘平道行之場（かるかんぺいみちゆきのば）」「仮名手本忠臣蔵五段目　山崎街道之場（やまざきかいどうのば）」など歌舞伎芝居系統の出し物を披露させていただきます。ここ駒衣の伊勢音頭の特色は、「手踊り」と「段物」の２種類あるところです。

餅搗き踊りは、杵で餅をつくという作業に歌や踊り、はたまた曲芸的な餅つきの動作が加えられて芸能まで高まったものです。

県内では、昭和 61 年の調査で旧行・現行合わせて 28 カ所の地域で餅搗き踊りの伝承が確認されていましたが、今日では旧大宮市日進、指扇、上尾市藤波、桶川市下日出谷、川越市南大塚、東松山市金谷のわずか６カ所となってしまっています。その分布地は、北足立北部、入間、比企地方など埼玉県の中央部に集中しています。このあたりは万作の芸能が盛んなところでもあり、餅搗き踊りと万作の踊りが融合したことが窺えるところでもあります。

餅搗き踊りは七五三の祝いや家の新築祝いなど地域の人々から頼まれて行っていたものでありましたが、核家族化や住宅事情の変化により、かつてのような依頼もほとんど無くなってしまいました。今日伝承されている餅搗き踊りは、保存会の人々の努力によって公開の期日を定め演じると共に後継者養成にも積極的に取り組んでいるところです。今回出演の指扇（さしおうぎ）地区の餅搗き踊りも、地域の新築祝いや七五三（帯解き）のお祝いなど目出度い席に頼まれて披露したもので、搗かれたお餅は、親類近所や観衆の人たちにも振る舞ったことから地元（指扇領別所）では親しみを込めて「別所（べっしょ）の接待餅」と呼ばれていました。配られた餅は、「無病息災で長生きできる。」などといわれ縁起の良いものとされています。

（民俗文化担当　山本修康）

駒衣の伊勢音頭

指扇の餅搗き踊り

学芸員のおと

ー神宮のある風景とまちづくりー

いよいよ、10月16日から特別展「お伊勢さんと武蔵」が始まります。この展示を一人でも多くの人に見てもらいたいと祈る日々が続いています。

今回は、伊勢神宮の式年遷宮などを記念して開催された博覧会と伊勢のまちづくり、まち育てに焦点を当ててみましょう。

伊勢のまちづくり

さて、そこで突然ですが、ここでクイズです。「甘味」、「風景・景観」、「まちづくり」の３つの言葉からあなたは何を思い浮かべますか？

ヒントは、「菓子屋」・「栗」・「赤福」です。

正解は「観光＆まちづくりのトップランナー」です。

理由は、次のようになります。観光都市川越のにぎわいは、菓子屋横丁の再生と蔵づくりの町並み保存による景観づくりが大きな役割を果たしています。浮世絵の奇才葛飾北斎が、1844（天保14）年に訪れ、その後約５カ年に亘って住んだ町として、図らずも観光地となったのは、長野県小布施町です。そして、「栗の小径」を中心とする風景を整えながら、暮らす人にやさしいまちづくりを推進したキーパーソンは、栗鹿ノ子などの甘味で有名な小布施堂のご主人でした。

そして、伊勢神宮の門前にある和菓子の老舗赤福が、年商を超える私財総額140億円と６年間の歳月を掛けた『おかげ横丁』の建設をきっかけに、神宮の門前町である「おはらい町」の景観整備が進みました。1973（昭和48）年の第60回式年遷宮が終わってから後、1980年代になると伊勢神宮内宮門前町の往来者は年間20万人になってしまいました。しかも、その多くは正月に集中していました。１ヶ月2,000人ということもあったと聞いています。しかし、伝統の町並みの再現をコンセプトにした「おはらい町」の魅力づくりは、2002（平成14）年には年間約300万人を集めるようになっています。

伊勢の繁栄

ご存じのように、江戸時代には参勤交代のために街道や宿場が整備されていました。しかし、庶民は自由に旅に出ることは出来ませんでした。それでも、「医療としての湯治」や「信仰としての寺社参詣」が名目の旅であれば許されていました。とりわけ、メジャーである「お伊勢さん」は容認されており、好都合でした。従って、伊勢神宮を中心とする一帯は、昔から「農民の楽しみの旅」のメッカでした。特に、「お陰まいり」の流行った時には、年間４百万人以上の人々で活況を呈したようです。さらに、1929（昭和４）年の第58回式年遷宮の時は、385万人の参詣者があり、前年より100万人近く増えたと記録されています。

遷宮と博覧会

先述した、おはらい町のまちづくりには、遡る歴史があります。そこには、遷宮と博覧会の密接な関係があります。時代順に見てみましょう。

1930（昭和５）年には、先述の第59回遷宮に因む「御遷宮奉祝神都博覧会」が行われています。次に、戦後の復興と宇治山田市の新しい街づくりを目的に、伊勢志摩国立公園の観光宣伝とテーマとした「平和博覧会」が開催されました。因みにこの時、神宮徴古館を修理改築してメイン会場にしています。

そして、わずか６年後の1954（昭和29）年には、前年に太平洋戦争の混乱で４年遅れてようやく実施された第59回遷宮記念と伊勢志摩の産業文化振興の推進をスローガンに「御遷宮記念お伊勢博覧会」を行っています。展示の目玉は、神宮御神宝のほか、昭和８年に皇太子誕生を記念して東京府が伊東深水ほかの巨匠に描かせた78点の絵画でした。東京都美術館の地下倉庫に眠っていたこれらの絵画は、このお伊勢博覧会だけでなく、1958（昭和33）年の「伊勢参宮博覧会」にも展示され、博覧会終了後は東京都から伊勢市に寄贈されました。さらに、1993（平成５）年の第61回式年遷宮の翌年には、「まつり博・三重 ’94」が開かれています。

このように、数々の博覧会の開催は、伊勢のまちづくりに大きな役割を果たしてきました。そして、これからの伊勢のまちづくりは、伊勢神宮をランドマークとした祝祭空間としてどのようにデザインされるか楽しみです。

（民俗文化・展示・資料調査担当　井上　肇）

常設展示室から　重要文化財の瓦塔・瓦堂を展示しました！

「古代」という言葉を聞くと、皆さんはどんなイメージを頭に描きますか？飛鳥や奈良の古墳や寺院が点在するような風景を思い浮かべ、ロマンを感じる方も多いのではないでしょうか。

古代の日本は、中国の隋や唐をお手本に、国家体制が整えられていった時代です。

公地公民制を建前に、地方や人々を掌握するため、全国は畿内と七道に分けられ、さらに国・郡・里（のちに郷と改称）に区分されました。七道とは北陸道・東山道・東海道・山陰道・山陽道・南海道・西海道のことで、このいくつかは現在も鉄道路線等で耳にしたことがあるかもしれません。

埼玉は武蔵国の一部で、東山道（のちに東海道）に所属していました。武蔵国には21郡あり、その郡名の中には入間郡・大里郡など現在の郡名と同じものもあります。

税の仕組みも古代に整えられました。租は水田にかかる税で、田1段について稲2束2把（収穫の約3%）、調は布や糸、各地の特産物、庸は都での労役などです。調として納められた特産物は、遺跡から出土する木簡から知ることが出来ます（写真2）。地方の特色がよく分かり、興味深い資料です。

武蔵国からは鮒・菱の実・蓮の実・布などが納められました。今回の展示替えでは「税として納められた各地の特産物」が一目で分かるような地図パネルを作成しました（写真1右上）。

さて、最後に紹介したいのは、仏教信仰の広がりという点です。古代の日本は仏教による「鎮護国家」を目指し、各国に国分寺を建立しました。武蔵国分寺は現在の東京都国分寺市に建てられましたが、その屋根に拭かれた瓦は各郡が負担しました。その証拠に、瓦の中には郡の名前を印やヘラ書きで記しているものがあります。仏教信仰を受け入れた財力のある地方豪族は、氏寺として寺を建立したケースもありました。

しかし、寺を建立するには莫大な費用がかかるため、一般的な村では小型の塔や堂で代用しました。埼玉では焼物製の小型の塔が多く出土しており、瓦塔と呼んでいます。今回の展示替えでは、重要文化財に指定されている美里町東山遺跡出土の瓦塔・瓦堂を新たに展示しました（写真1左）。屋根や軒などが細かく表現されており、工芸的にもすぐれたものです。ぜひ、展示室で実物を御覧下さい。

（展示担当　水口由紀子）

写真１：展示替え後の古代の埼玉コーナー

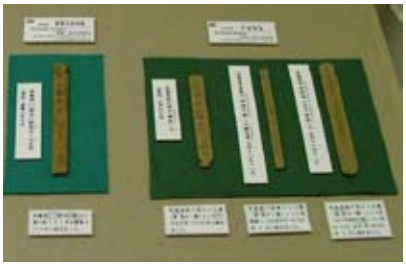


写真２：税を運搬する時に、荷物に付けられた付け札（木簡）。税の内容や納めた人などの情報を知ることができる、貴重な資料です。

歴史のしおり 「今は昔」のすばらしい包装材　ヘギのお話

「納豆、納豆・・・」と自転車に乗ったおじさんの甲高い声が響きわたると、どこからともなく人が寄ってきて買い求める。ひととおり売り切ると再び「納豆、納豆・・・」と叫びながら次の場所へ向かった・・・。これは県北のある町で昭和30年代の中ごろまで見られたごくふつうの朝の光景でした。当時の納豆は三角形にしたヘギに包み込んだもので、現在の包装とはかなり異なります。ヘギの包装は一見不衛生のように見えますが、実際は通気性や殺菌性に優れています。ヘギは納豆のほか、おにぎりや魚の切り身、あるいは団子などの和菓子の包装、はたまた食料品店で値段を表示する手札としても利用されていました。

ヘギはアカマツを薄く削って作られたもので、一般には「経木」と呼ばれています。紙のないときに写経用としてこれが用いられたことから、「経木」と呼ばれるようになったと伝えられています。埼玉ではヘギのほか、場所によってヒギとかヒゲなどと呼ばれていました。これが作られた地域を見ると、いちばんさかんだったのは比企郡滑川町で、ほかに東松山市・飯能市・秩父市・皆野町・熊谷市などでも作っていました。

ヘギで包んだ食品の包装材は、古くは竹の皮が用いられていました。ところが、江戸末期の弘化から嘉永年間にかけ、関東一円で竹が枯死する現象が相次いだため、竹に代わる包装材の考案が急務となりました。

こうした状況のもと、当時の月輪村（現　滑川町）の住人だった宮嶋勘左衛門は附木（つけぎ）にヒントを得て新たな包装材の創作を試みました。月輪周辺では松材が豊富だったため、松を材料とするアイテムに目をつけたのでした。しかし、いざ着手してみると、なかなか思うようにいかず、苦心を重ねたそうですが、ようやく樫の台に刃物を差し込み、松材を当てて薄く削ることのできる道具の完成にたどりつきました、ところが、今度は竹が再び生育し、竹皮が出回ったため、彼の功績が日の目を見ないまま54歳の生涯を閉じてしまいました。その後、勘左衛門の遺志を継いだ人々が経木の普及に努め、竹の皮をしのいで包装材のトップを占めるようになりました。手突きによる経木作りがさかんだったのは明治・大正年間までで、昭和10年代には動力が導入されました。そして、昭和30年代以降ビニールや発泡スチロールによる包装材が普及したため、経木はしだいに廃れてしまいました。

平成15年の春、国営森林公園の「梅まつり」で、「ひぎつくり」が再現されました。これは、地元の職人が手突きによる経木作りの道具を丹念に調査して復元した成果を試みるイベントで、どんな経木ができるか期待が高まりました。終わってみると、なかなか薄く削ることができず、伝統の手仕事の「重み」を改めて感じさせられました。

（学習支援担当　柳　正博）

「梅まつり」でのひぎ突き再現　（国営森林公園）

宮嶋勘左衛門の功績をたたえる碑（滑川町月輪）

歴史と民俗の博物館イベント情報（１０月～１１月）

特別展「お伊勢さんと武蔵」の会期は　１０月１６日（火）から１１月２５日（日）までです。

10月

- 10・11日（水・木）　江戸組紐帯締め作り
- 13日（土）　昔の遊びを楽しもう　博物館裏方探検隊
- 14日（日）　歴史民俗講座　「大宮公園の設計者たち～明治・大正編」
- 16日（火）　特別展「お伊勢さんと武蔵」
- 17日（水）　学芸員の仕事紹介「獅子頭の手入れ」
- 20日（土）　博物館裏方探検隊
- 21日（日）　特別展記念講演会「伊勢の神宮と日本人」　ミュージアムトーク「埼玉の城絵図」
- 27日（土）　江戸囃子体験教室　博物館裏方探検隊
- 28日（日）　特別展記念講演会「伊勢の神宮と武蔵」　ー武蔵人の伊勢信仰ー

11月

- 3日（祝・土）　十二単の着装　博物館裏方探検隊
- 4日（日）　歴史民俗講座「縄文から弥生へ」
- 10日（土）　博物館裏方探検隊　これは何でしょう「音のかたち」
- 11日（日）　特別展記念講演会「神宮の神宝と御装束」　ー日本人の美意識の根源を考えるー　ミュージアムトーク「お伊勢参り」
- 14日（水）　県民の日記念事業　一日館長・鎧の着装　博物館裏方探検隊
- 17日（土）　博物館裏方探検隊
- 17日（土）・23日（金）　福熊手作り
- 18日（日）　民俗芸能講演「伊勢音頭と接待餅」　ミュージアムトーク「古墳の副葬品」
- 21日（水）　学芸員の仕事紹介「縄文土器の実測」
- 24日（土）　秩父屋台囃子体験教室　博物館裏方探検隊
- 25日（日）　押し絵羽子板作り

予　告　　特別展「日本の色彩～藍・紅・紫～」

日本古来の伝統色である藍・紅・紫。この三色を中心に「色彩」にまつわる伝統美や染色技法、歴史などを様々な作品・視点から紹介し、日本人の美意識を探ろうとするものです。埼玉の伝統工芸である青縞や長板中型をはじめ、山形の紅花関係資料、鹿角地方（秋田）の紫根染めの資料などを展示いたします。

会　　期　平成２０年２月９日（土）～平成２０年３月２３日（日）

関連事業　草木染め体験講座・印染（しるしぞめ）展示会

平成１９年１１月２６日（月）から平成２０年２月８日（金）まで施設の改修のため休館させて頂きます。

■交通機関
東武野田線・大宮公園駅下車徒歩５分
ＪＲ宇都宮線・土呂駅下車徒歩18分

埼玉県立
歴史と民俗の博物館（編集発行）
〒330-0803　さいたま市大宮区高鼻町４丁目219番地
ＴＥＬ．０４８－６４１－０８９０（管理）
０４８－６４５－８１７１（学芸）
ＦＡＸ．０４８－６４０－１９６４
http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/

埼玉県立歴史と民俗の博物館だより
Vol.2-2（通巻）第５号
2007年10月15日発行

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用
PRINTED WITH SOYINK